

第55号 「環境と意志」

2019年4月1日、5月からの新元号が「令和」と発表されました。そして4月9日には、新紙幣が刷新・発行されることも発表されました。紙幣は、基本的に20年周期で刷新されており、前回の2004年から20年後の2024年に新紙幣が刷新・発行予定だそうです。1万円札は福沢諭吉から「日本の資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一に、5千円札は樋口一葉から「女子専門教育の先駆者」と呼ばれる津田梅子に、千円札は野口英世から「日本の細菌学の父」と呼ばれる北里柴三郎に変わります。いずれも、明治時代以降の日本の発展に大きく貢献した人たちです。

上記3人のうち、教育家である津田梅子は、江戸時代末期の1864年に生まれました。日本最初の女子留学生として、7歳で岩倉具視遣外使節に同行して渡米。帰国後、明治33年に女子英学塾（のちの津田塾大学）を創設しました。津田梅子の言葉に、「環境より学ぶ意志があればいい」というものがあります。この言葉の真意とは異なるかもしれませんが、学ぶ環境と学ぶ意志について、私が最近感じていることを述べさせていただきます。

私が高校生だった頃の教育環境は、今と比べて決して良い環境とは言えなかったと思います。そして授業についても、ほとんどが先生から一方的に教えていただくという形式でした。また私自身、なぜ勉強するのかなどは考えず、勉強するのは当たり前のこととして捉えていました。

しかし、時代の変化とともに教育も変わっていきます。子どもたち一人一人のニーズに合わせた教育、個別支援・指導の充実、授業力向上の取組、ICT 機器環境の整備等、昔とは比べものにならないほどの教育環境の充実・整備がなされています。さらには、学校と地域が一体となって、子どもたちが学びやすい環境を作ることが重要視されています。本当に素晴らしいことだと感じます。ただ、忘れてはならないこと、それが「環境より学ぶ意志」です。どれだけ環境を整えようと、子どもたちの学ぶ意志がなければ意味をなしません。我々教員は、環境を整えると共に、子どもたちの学ぶ意識を育てなければならないと考えます。津田梅子の残した「環境より学ぶ意志があればいい」という言葉の意味を、物が豊富になり環境が整いつつある今だからこそ、改めて考えていく必要があると思います。